

NewsLetter

No. 2 2018年3月31日

伊勢参宮ツーリズムの近代史に関する実証的研究
—御師廃止から昭和戦前期まで—
基盤研究 (C) 17K02146

目次

巻頭言	平山昇	1
2017年度の研究成果		2
【活動報告】		
女性民俗学研究会第677回例会	田口祐子・濱千代早由美	6
第5回首都圏災害史研究会	谷口裕信・濱千代早由美	7
第2回研究会報告	鈴木勇一郎	8
2018年度の活動予定		10
【研究ノート】		
前近代宇治・山田の空間と神宮家・師職家	櫻井治男	11
伊勢をはなれた御師家族の震災経験 —関東大震災の安否を知らせる書簡から—	濱千代早由美	15
資料紹介「尚武出産祝」	田口祐子	21

巻頭言



代表
平山 昇

本科研は、近世に全国規模で参宮ツーリズムのコーディネーターを担っていた御師システムが明治初年に廃止されて以降、伊勢参宮ツーリズムが変容していった具体的な歴史的過程について、伊勢の地域史料（旧御師家史料）を基幹として具体的に明らかにしていくことを目指しています。

前号（No.1）発刊以降の主な活動としては、2018年2月18～19日に実施した第2回巡検・研究会があります。1日目には旧御師岩井田家の檀家が分布していた地域（埼玉県・群馬県・茨城県にまたがる）を巡見し、その地理的状況や各地域の神社等における伊勢信仰の痕跡を探訪しました。2日目には立教大学において、櫻井治男氏（連携研究者）による前近代の宇治・山田の空間と神宮家・師職家に関する報告が行われたほか、各自の研究進行状況の報告、今後の研究の方向性についての議論を行いました。詳しくは本号後掲の第2回研究会報告および研究報告をご覧ください。

前号の巻頭言でも記しましたが、伊勢参宮にかぎらず社寺参詣

をめぐる既存の研究は、民俗学・宗教学・近世史研究は「参詣者（旅行者）・地域社会」に、近代史研究は「近代交通機関（鉄道）」や「国家神道（近代天皇制）」に主として注目する傾向にあり、これら双方の視点をバランスよく組み込んだ立体的な歴史像の構築が課題として残されたままです。このように研究対象が近接・重複しながらも相互対話が十分でなかった歴史学・民俗学・宗教学の研究者が、本研究によって、「伊勢参宮ツーリズムの近代史」という新たな研究領域を共通フィールドとして集い、学際的アーリーナを形成することが本科研の重要な目的ですが、すでに第1回・第2回の巡見・研究会（第2回からは谷部真吾氏も参加）を通じて、これら様々な領域の気鋭の研究者が和気藹々と交流や議論をする雰囲気が醸成されてきたと自負しています。

今後もニュースレターを定期的に発行しつつ、社会に広く成果を公開していきたいと考えています。

2017年度の研究成果

平山 昇（代表：九州産業大学）

HIRAYAMA, Noboru

私は、近現代の伊勢参宮ツーリズムの動向について、政治思想的文脈（ナショナリズム）と社会経済的文脈（娯楽・ツーリズム）の双方を視野に入れて、交通・旅行業界／メディア（新聞・雑誌）／教育界／神社界／実業界といった一枚岩ではない様々な推進主体が（同床異夢の関係をなしながら）絡んでいった過程を明らかにすることを目的として研究をすすめてきた。これまでの研究成果をまとめて、第76回日本宗教学会大会（東京大学2017年9月17日）および第40回ドイツ現代史学会シンポジウム（共立女子大学2017年9月24日）において発表した。また、近代の社寺参詣を扱う研究書が発刊されたため、その書評を執筆した（拙稿「書評と紹介 中西聡著『旅文化と物流 近代日本の輸送体系と空間認識』『日本歴史』838、2018年3月）。

現時点では岩井田家資料の読み込みは十分にすすめられていないので、今後はこれを読み込んで、1872年の御師制度廃止という大変革後に参宮ツーリズムの立て直しを図った伊勢の地域社会側の動向、鉄道資本による手軽な参宮日帰り旅行、あるいは大正期から拡大していく小学校児童を中心とする伊勢参宮修学旅行といった近代的な参宮旅行が、旧御師の役割を代替・再編成していく過程、それにもよって、コーディネイターとしての旧御師の従来からの存在意義が変化していく過程といった点について、検討できればと考えている。

谷口 裕信（分担者・皇學館大学）

TANIGUCHI, Hironobu

第1回研究会以降、本科研に関して進めてきた調査研究は、以下の2点である。

- ①旧御師資料班の一員として、岩井田家資料を整理する（目録作成、撮影準備等）
- ②News Letterへの論文投稿

①については、月1回程度の調査なのでさほど進捗していないが、筆者がこの間担当した1箱分の整理が完了し、撮影に取り掛かれる状況にある。またその過程で、旧檀家から岩井田家に宛てられた書簡のうち、水害や干害、電害などの被災に関して述べているものを抽出し、第5回首都圏災害史研究会において概要を報告した（→活動報告参照）。

②については、「御師廃止後の龍大夫と旧配札地域—埼玉県北足立郡を事例として—」をNews Letter No.1に投稿した。当初は史料紹介にとどめ、追加の史料調査を実施したのちに論文化する予定であった。ところが埼玉県立文書館が大規模改修工事等に入り、2017年度～18年度に資料閲覧が制限ないしは休止となること、①の作業の目途がきつ々しあり、岩井田家資料の読解・分析を本格的に進めていく必要があることから、とりあえずこれまでの史料調査の成果をまとめたのが本論文である。

最近、石川達也氏の論文（「御師制度廃止後の伊勢神宮崇敬団体に関する一考察」『埼玉大学紀要（教養学部）』52-2、2017年）を得るなど、御師廃止後の「師檀関係」に関する研究が進展を見せている。同論文は近世期の伊勢講から近代の神宮奉賛組織への移行との対比で、旧御師と旧檀家の関係性を論じる貴重な成果であろう。ただし
a) 旧御師が「新制度で許される形で檀家の再編をはか」った（同2p）その再編の対象は、旧檀家だけなのかどうか、
b) 日清・日露戦争期に設立された神宮崇敬団体を、旧御師が講の維持のために行った「ある種のサービス」（同9p）、あるいは「半公式的な性格」「軍国主義と結びついた国家神道」としての「伊勢信仰」の起源」（同11p）とみることの妥当性については、検討の余地があると思われる。

a) については、龍大夫が組織した「教会本院」に関する史料から、龍大夫が「教会本院」を通じて旧檀家に限らず、

新規の「檀家」を獲得しようとしていたことが明らかになった。またこれに関連して、若谷八郎右衛門（北足立郡高畑村）宛の龍大夫や腹巻大夫の書簡類によれば、若谷が腹巻大夫に加えて龍大夫の「檀家」であったことがうかがえ、「檀家」をめぐる複数の旧御師がせめぎあっていた状況が読み取れる。御師制度廃止後は「御師」と「檀家」との関係性が流動化した結果、「旧檀家」以外への接触を積極的に行う「御師」もいたのである。

b) については日清戦争当時に、龍大夫が「永代大々御神楽講」の講員に対して述べた「報国ノ赤誠」という言葉に注目した。その言葉の背景には、戦勝祈願等により参宮客が増加し、好景気を迎えていた当時の宇治山田における雰囲気があった。日露戦争時に戦勝祈願を請け負う教会講社の叢生を招いたのは、このような戦争と結びついた好景気の記憶があったからだろう。日露戦争時の教会講社と旧御師との関係性については、さらに検討する必要があるが、旧御師の言説の背後には何があったのかについて、今後は岩井田家資料に基づき旧御師の経営の実態に即した議論を構築していきたい。

なお報告後の議論においては、旧御師のせめぎあいに関して、国鉄と私鉄との関係にみられたような「競争と協調」という観点が想起されること、同様な観点から、地域における信仰の形態に関しても「せめぎあい」だけではなく「共存」している可能性もありうるなどの指摘を受けた。

濱千代 早由美（分担者・帝塚山大学）

HAMACHIYO, Sayumi

本年度の本科研に関する調査研究は、旧御師資料（岩井田家資料）の目録作成および翻刻と、岩井田家檀家地域に関する基礎資料のデータベース作成が中心となった。櫻井・谷口両氏とともに進めている目録作成については、調査回数の制約もあり、進捗ははかばかしくなく、今後も作業を継続する必要がある。個人の成果としては、北関東の複数の県にまたがる檀家地域を持つ岩井田家資料を読み込むための基礎資料として、自治体誌等の信仰、鉄道、災害、社会変動などに関する記述を精査し、データベースの作成に着手した。また、何点かの資料については翻刻を行い、成果公表を行うことができた。概要は以下の通りである。

女性民俗学研究会第 677 回例会での報告（2017 年 11 月 26 日）

報告の概要については、『News Letter』本号（「活動報告」pp.6～7）にて報告した。

第 5 回首都圏災害史研究会での報告（2018 年 2 月 17 日）

『News Letter』本号（pp.15～20）に詳細をまとめた。

資料紹介：「岩井田家資料『年中行吏記草稿』（明治期）」

（『皇學館大学研究開発推進センター紀要』4、pp.191～203、2018 年）

本資料は『年中行吏記草稿』、次いで『留守中心得雑記』の順に合綴されており、『留主中心得雑記』については『皇學館大学研究開発推進センター紀要』第 3 号（2017 年）において、すでに紹介済みである。このうち、『年中行吏記草稿』について翻刻を行った。はっきりした成立年代が不詳であるものの、その記述内容から、明治 29 年以降に記されたもので、岩井田家資料に含まれる年中行事記のうち最も新しいものと推察される。資料の状況としては、御師としての記述、神職家としての記述は薄く、家族に関する行事（誕生祝い、命日）についての記述が散見され、明治期の宇治における一家庭としての私的側面についての資料としての性格が強い。御師の迎えた近代を多角的に検討する手がかりとなる資料である。

櫻井 治男（連携研究者・皇學館大学）

SAKURAI, Haruo

目録作成のための調査にご尽力いただきました。

また、第28回南方熊楠賞（南方熊楠顕彰会）を受賞されました。

（編集）

鈴木 勇一郎（連携研究者・立教大学）

SUZUKI, Yuichirou

研究の進捗状況

本年度は、まず近代の伊勢参宮や宇治山田案内書にできるだけ多く目を通し、当該期における伊勢参宮および宇治山田の全般的状況の把握に努めた。

岩井田家文書も目録をもとに撮影済みの史料を読みはじめているが、意外にどのような旅をしていたのかを示す史料は少ないことに戸惑いを覚えている。しかし、四日市港や木曾川停車場など、水運との結節点の利用をしばしば見出すことができたことは収穫であった。今後、史料を読み進める中で、近代における旅の実態がどのように変容していったのか考えていきたい。

また、今回、埼玉県、群馬県、茨城県、千葉県、岩井田家旧檀家地域を廻ったが、いずれも利根川流域に位置していることが確認できた。利根川流域は近世から水運が盛んだったが、明治になると河床の浚渫など、河川改良が進んだ。その結果、通運丸のように東京から汽船が定期運航されるようになり、河川水運の利用が進んだ地域であった。もちろん、日本鉄道が開通するなど、鉄道の進出も早くから見られた地域であったが、河川も並行して利用されていた。この地域にも「境」、「前林」、「中田」、「栗橋」、「飯積」といった河岸が点在することから、近代になっても水運の利用が盛んだったことは確かである。当初は、近代に入るとこの地域の伊勢参宮も一挙に鉄道への転換が進んだものと仮定していたが、こうした先入観は大きく修正したうえで、今後、史料を読んでいく必要を痛感している。

谷部真吾（連携研究者・山口大学）

YABE, Shingo

巡見に参加して

今回初めて、伊勢の御師・岩井田家の檀家が広がる埼玉県・群馬県・栃木県・茨城県・千葉県の県境が入り組む地域を巡った。不勉強のため、当該地域の文化的状況に詳しくない私にとって、富士塚が少なからず見られたことは驚きであった。富士塚の存在は、この地域に富士山信仰があったであろうことを示唆している。また、埼玉県幸手市神明内にある三笠神社は、祠がなく塚があるだけの社であるが、その塚にはいくつかの石碑が建てられていた（写真1・2）。頂上の石碑には、左から三笠山神社、御嶽山神社、八海山神社と刻まれている（写真3・図1、なお石碑の建立年代は不明である）。これからすると、御嶽山信仰や八海山信仰もあったものと思われる。よく知られているように、富士山信仰、御嶽山信仰、八海山信仰は、いずれも講を形成することもある山岳信仰である。

本研究では、近代における伊勢神宮への参拝を、ツーリズムの観点から実証的に明らかにすることが目指されている。そのため、この地域の事例をあつかう際にも、伊勢講が主な分析対象となることであろう。しかしながら、

当該地域の人々からすると、伊勢神宮も多様な信仰対象の1つに過ぎなかったのではないだろうか。今回の巡見に参加して、そうした地元の人々の認識にも、ある程度配慮しつつ研究を進めていくことの重要性について考えさせられた。



写真1 埼玉県幸手市神明内の三笠神社（側面）



写真2 埼玉県幸手市神明内の三笠神社（正面）



写真3 三笠神社山頂の石碑



図1 三笠神社山頂石碑のスケッチ

市田雅崇（研究協力者・国士舘大学）
ICHIDA, Masataka

講研究会にて北関東の伊勢講に関する発表を行った（2017年9月30日 於駒澤大学）。岩井田家文書にある埼玉県利根川流域の伊勢講の明治初期の状況を報告し、地域社会の社会背景とあわせて考察した。会メンバーからは地域社会の自然環境（水害、霜害など）や交通網の変化（利根川水路から鉄道へ）との関連、また文書に記載されている道中の旅行業者の変遷や土産物といった伊勢参詣の過程における変化との関連についてコメントをいただいた。

個人テーマの進捗状況と現時点での問題意識は以下のとおりである。

1. 戦後のメディア変容およびインフラ整備に関わる儀礼産業・宗教施設の動向（茨城県古河市・猿島郡における産育儀礼を通して）

本テーマについて、岩井田家の檀家地域の一つである茨城県古河市における産育儀礼の変遷・実態について調査を進めている。現在の主要な調査対象は、七五三である。2017年11月の調査では、古河の総鎮守であった雀神社が、現在の主要な七五三参拝先となっていることがわかった。また地域住民への聞き取りより、七五三を祝う家族の多くが、近年は写真館や貸衣装業者等の儀礼サービスを利用していることがわかり、それらの動向の確認の必要性を実感した。

現時点では、本地域の七五三やその他類似の儀礼に関する実態や変遷を明らかにするために、主要神社と儀礼サービス業者に関する情報収集を中心におくこととする。また、地域の産業構造、交通事情、人口構成等の変容とその関係にも目配りしていきたい。

2. 現代における厄年と社寺の関係のとらえ直し（大阪の交通機関という視点から）

2015年に実施した「大阪府内の神社厄年実態調査」（田口）で、今から30年前まで一般的に厄年に関する参拝は、特定の寺院に限られていたが、徐々に参拝先が地域の神社へも広がりはじめ、厄年信仰の動向に変化がみられたという結果を示した。

この動向の変化について、具体的な事例を挙げて詳細に明らかにしていきたいと考えている。そこで、昨年は大阪の調査結果で、厄年に関する参拝が多いとされた寺院の1つである水間寺（貝塚市）を対象に、見学や関係者への聞き取り調査を試みた。水間寺参詣を目的に創業を開始した水間鉄道との関係にも注目して、信仰の動向の変化を追いたいと考えている。現在、資料収集、資料読込・整理の段階であり、今後の具体的な進め方については検討中である。

3. その他

女性民俗学研究会第677回例会（2017年11月26日）にて、本ニューズレターで資料紹介した「尚武出産祝」を元に、神宮旧御師家の出産祝について研究報告した（詳細は「活動報告」参照）。

活動報告

【女性民俗学研究会第677回例会】

日時：2017年11月26日（日）

場所：東京ウィメンズプラザ 第一会議室 A

参加者：田口祐子・濱千代早由美

研究会の概要

女性民俗学研究会は昭和22年（1947）に柳田國男の講演をきっかけで始まった会であり、その後、女性研究者の育成を目的に、研究会の形をとるようになった。現在は月1回の例会を中心に活動しており、主に会員の研究発表の場となっている。女性、産育に関するテーマの発表が多いが、芸能や口承伝承など民俗学一般に

関わる発表も行われている。会員それぞれが持つテーマを研究会で共有し、意見交換しながら、会員相互の研究の深化に努めている。

会誌として『女性と経験』を年1回のペースで定期刊行している。ここ数年は、元代表であった瀬川清子会旧蔵資料が会に寄贈されたことを受け、その整理をすすめ、平成28年に『瀬川清子旧蔵資料目録 附・民俗写真集』としてまとめた。

本研究会の例会において、濱千代と田口は、御師資料に含まれる「子ども」に関わる資料を用いて、これまでの研究成果を踏まえた上で、どのような研究が展開できるかについての問題提起を行った。今回の報告は、本科研の研究趣旨とは異なるものの、参照する資料は岩井田家および浦田家という伊勢神宮旧御師家に伝

わるものである。ともに宇治の旧御師家に関する資料を扱ったため、本科研によって共同研究を行うことの意義や可能性についての理解も得られた。それぞれの報告の要旨および明らかになった課題は以下の通りである。なお、資料の概要や本科研を含む研究の経緯については、濱千代より報告を行った。

報告内容（濱千代早由美「疱瘡治癒祈願と伊勢御師」）

岩井田家と同じく内宮旧御師家である浦田家所蔵資料の中から、幕末期に浦田家に対して寄せられた疱瘡治癒祈願とそれに対する祈禱に関する史料について紹介した。疱瘡治癒祈願の方法は、祈願対象となる病児の着物の切れ端とともに祈禱を依頼する感染呪術の事例であり、このことを通して神宮と医学に関する問題を取り上げた。ローカルな服忌令を適用する場合に、病と結びつくケガレ感が矛盾を生じさせなかったのかどうかなどが今後解明すべき課題となる。

現存史料が断片的であること、類例が見られないこと、権力者の子弟のみに関する特殊事例であることなどから、「民俗」として捉えることには課題が残るものの、その史料価値の高さについて確認された。参加者より、疱瘡習俗についての関連事例が紹介され、今後の研究の手がかりが得られた。

報告内容（田口祐子「神宮旧御師家の出産祝 — 『尚武出産祝』（明治36年2月25日）について—」）

「伊勢信仰と人生儀礼」を理解する手がかりとして、岩井田家資料の中から「音信帳」を取り上げ、他の地域で見られる出産祝いの事例との比較を行った。とくに、餅とうこんをやり取りすることに注目し、贈答行動を通して伊勢の社会関係、伊勢を中心として展開される広域的空間構造を析出することを試みた。

参加者からは、伊勢に関する他の資料を読み込み、やりとりされる物の形状や量などの把握につとめることと、イエとイエとの関係などを把握し、贈答行動の意味を深く理解することの重要性が指摘された。

（田口祐子・濱千代早由美）

【第5回首都圏災害史研究会】

日 時：2018年2月17日（土）

場 所：横浜開港資料館会議室

参加者：谷口裕信・濱千代早由美

報告内容（谷口裕信）

今回谷口は、「岩井田家資料にみえる旧檀家地域災害関係書簡」と題して報告した。資料整理の過程で見つかった旧檀家と岩井田家との書簡のやりとりのうち、旧檀家地域における災害状況が判明するものを抽出して一覧表にまとめるとともに、書簡中に多く

登場する大字については、明治の大合併直前頃（1887～88年）作成された地図にマークしたものを配布した。

災害状況としては、旧檀家地域が利根川流域ということで水害が大半を占め、1910年に東北～関東地方を襲った大水害の影響について言及した書簡もある。一方で干害を伝える岩井田家宛書簡もあり、この地域の人々が水を防ぐだけでなく、水の確保に関しても苦しめられていた様子が読み取れる。このほか北関東では多く見られる降雹や雷の被害についても、講の取りまとめ役と見られる人物が、各地域の被害状況を細かく伝えている。

地域は埼玉県北埼玉郡東村大字旗井、同郡原道村大字佐波・道目など、利根川右岸が多いが、茨城県猿島郡長田村大字栗山、同郡生子菅村など、利根川左岸の村々も見られる。

また時期は明治30年代～大正期にほぼ限られている。本報告の内容は以上であるが、災害に関する書簡のやり取りが特定の時期に限定されている問題をどう考えるかについて、若干の見通しを以下に示したい。

これはあくまでも現段階での調査結果に基づくものだし、それ以外の時期に旧檀家地域で災害が起きなかったことを示唆するものではあるまい。むしろ災害は起きていたが、岩井田家と旧檀家とのやり取りの中で、災害を持ち出す必要がなかったと考えるのが自然ではないだろうか。

今回報告した書簡は基本的に、旧檀家が被災によって講金、初穂料の送金延期・減額・免除を岩井田家に要請するものである。それ以前、すなわち明治20年代以前は被災したとしても、講金、初穂料を岩井田家へ送金することを旧檀家は当然と考えていたが、明治30年代になると、それが容容して旧檀家は被災を口実にするようになったとは考えられないか。さらに関東大震災（1923年）のお見舞いとして岩井田家から出された旧檀家宛の年賀状が、宛先不明で返送されたことにも見られるように、大正末年には岩井田家と旧檀家との関係性は希薄となっていた。つまり、明治30年代～大正期に旧檀家地域から岩井田家にもたらされた災害に関する書簡は、岩井田家と旧檀家との関係性が希薄化していく過渡期にあって、その関係性をなかなか断ち切ることができない旧檀家側の胸の内を吐露しているようにも読めるのである。この読みが妥当であるかどうか、今後の岩井田家資料の調査および首都圏災害史研究会での議論を俟つことにしたいと思う。

報告内容（濱千代早由美）

岩井田家資料の中から、大正12年10月に出された関東大震災の安否を知らせる書簡について、口頭にて報告した。本号掲載の「伊勢をはなれた御師家族の震災経験 — 関東大震災の安否を知らせる書簡から—」は、さらに加筆した上で、その詳細をまとめたものである。

（谷口裕信・濱千代早由美）

第2回研究会報告

鈴木 勇一郎

2018年2月18～19日の両日、岩井田家資料研究会第2回目になる巡見と研究会を実施した。

2月18日に実施した巡見は、御師岩井田家の檀家地域であった埼玉県久喜市、群馬県藤岡町、茨城県古河市等を廻ることが目的であった。特に当該地域の地理的状况、神社境内に残る「信仰の旅」の痕跡を把握することに重点を置いた。

〔若宮八幡神社・巖島神社〕

当日は10時30分に久喜駅前に集合し、レンタカーで出発した。県道3号線および国道125号線などを經由して、11時00分ごろ若宮八幡神社（加須市下新井461）に到着した。盛土の上に社殿がある神社で、伊勢代参の記念碑のほか、神仏習合や富士塚の痕跡を見ることができた。またこの神社の境内には、水利組合や耕地整理組合など、近代になってから建てられた巨大な記念碑も並んでおり、こうした土地改良事業が地域社会に与えた影響の大きさを垣間見ることができた。

続いて11時30分に巖島神社（加須市道目702）を訪れた。ここでも伊勢参宮に関する記念碑や富士講参拝記念碑を見ることができた。



若宮八幡神社にて（撮影：濱千代）

〔渡良瀬遊水地〕

12時ごろに途中参加のメンバーと古河駅西口で合流した。昼食を地元和食チェーン「ばんどう太郎」で摂った後、渡良瀬遊水地に赴いた。西側の群馬県藤岡町内野付近から同地域内に進入し、谷中村跡付近を通過して渡良瀬川を渡河、東側の栃木県下生井付近で

一般の市街地に出た。時間の関係で車中からの見学になったが、水に囲まれた北関東の平野部の広大さを実感することができた。

〔香取神社〕

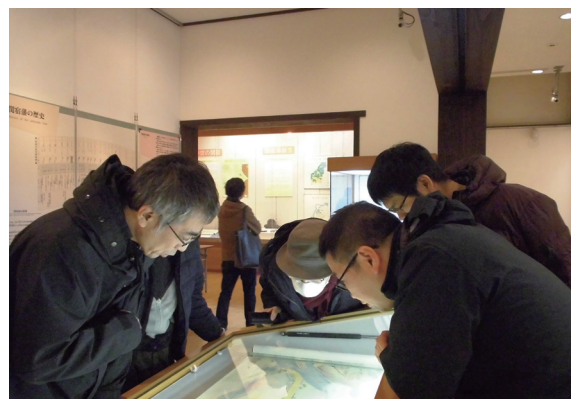
その後、国道4号線を南下し国道354号線に入り、14時40分ごろ香取神社（古河市下辺見450）に到着した。東北新幹線の高架橋にほど近い無住社だが、東日本大震災で倒壊した鳥居も速やかに復興されているなど、近年でも地域における信仰組織がそれなりに活発な活動を続けていることを確認することができた。



香取神社にて（撮影：谷口）

〔千葉県立関宿城博物館〕

再び国道354線を走って茨城県に入り、途中かつての利根川水運の拠点である境町河岸跡を見つつ、利根川を渡り千葉県に入った。15時20分に到着した千葉県立関宿城博物館では、まず最上階の展望台か



古地図で地形を確認する（撮影：濱千代）

ら岩井田家旧檀家地域を一望するとともに、利根川水運関係の展示を見学した。

〔「八海山神社」〕

関宿城博物館を15時50分に出発し久喜駅に向かったが、その途中16時10分ごろに幸手市神明内付近にある「八海山神社」を見学した。鳥居もなく田んぼの中の盛土があるという状態なので、正式な名称は不明だが、山頂にある「三笠山神社 八海山神社 御嶽山神社」と刻まれた石碑など、地域における信仰の状況を確認するとともに、一面の平野のなかで盛土がランドマークとして機能していたことを実感した。



八海山神社にて（撮影：濱千代）

16時40分ごろ、ほぼ当初の予定通りに久喜駅西口に到着し、レンタカーを返却した。同駅17時10分発りょうもう36号で浅草に出た後、合羽橋に近い「どぜう飯田屋」で懇親会を行なった。店の選択は代表の強い希望によるものだったが、意外に水気の多い、北関東の内陸部を巡った後に味わうものとして、どぜう鍋は非常にふさわしい料理であった。



久喜駅にて（撮影：谷口）



りょうもう号にてご満悦（撮影：鈴木）



飯田屋にて懇親と反省の会（撮影：谷口）

〔総括〕

今回の巡見で廻った岩井田家の旧檀家地域は、利根川沿いに点在していることを確認することができた。当初、近代においては伊勢参宮の鉄道輸送への移行を念頭に置いていたが、実際に旧檀家地域を廻ってみて実感したのは、「鉄分」より「水分」、水運との関わりの深さである。今後こうした観点からの調査研究の必要性を痛感した。

また訪れた各神社では、伊勢講のほかに富士講、御嶽講などに関わる石造遺物も確認することができたが、こうしたローカルな信仰圏との関係も今後の課題となろう。

なお、今回の巡見でわかったのは、一か所の神社を見るのに予想以上に時間がかかることである。今回はごく一部しか廻ることができなかったため、他の神社を廻ることも今後の課題となった。

〔研究会〕

2日目の19日は、10時から立教大学で研究会を開催した。午前中は櫻井治男氏による宇治山田の社会構造に関する報告があった。宇治および山田の自然地理的な環境から、古代、中世から近世にかけての制度や文化に至る包括的な内容であった。大湊や神社港との関係や山田奉行所位置の変遷、土産物屋街の位置など、初めて知ることも多く、今後の都市としての宇治山田を調べていく上で、不可欠な知識を得ることができた。また、討論の中では明治時代に神苑に作りかえられていった館町の性格について、今後より慎重に検討していくべきとの意見が出た。

昼食は代表の強い意向により立教大学第一食堂で摂ることになった。建物は大正時代にニューヨークのマーフィー&ダナ事務所が設計したもので、大学の学食としては日本に類例を見ない赤レンガ造の建築であ

る。ハリーポッターに出てくるような空間の中で、それぞれかつ丼やカレーといった何の変哲もないメニューを堪能した。

午後は各自の調査の進捗状況の報告と今後の進め方について検討を行ない、16時30分ごろ終了した。



食堂にて（撮影：濱千代）



研究会（撮影：濱千代）

研究会参加者

代表	平山
分担者	谷口、濱千代、森
連携研究者	櫻井、鈴木、谷部

2018年度の予定

2018年度は、2017年度内に整えた研究基盤を活用して、近代における参宮ツーリズムの実態を解明する資料の調査・分析を続行し、下記日程で研究会を実施する。

日時：2018年6月23日、24日
研究会の開催（於：立教大学）。

日時：2018年9月以降
研究会の開催（於：九州産業大学）。

前近代宇治・山田の空間と神宮家・師職家

櫻井 治男

近代以降の伊勢を理解する上で、前近代の伊勢が空間的・社会的にどのような状況であったのかを踏まえておくことは重要なことと思われる。ただ、伊勢の歴史を通じてそれらを概観することは発表者にとっては力の及ぶところではなく、本研究会が平成29年7月29・30日に巡検を実施した幾つかの地点を再確認することと、伊勢の記録・史料を読み解いて行く上で必要な社会的な状況、特に「神宮家」や「師職家」と呼ばれてきた存在について紹介し、併せて今後の自身の研究課題にかかわる一端について報告することとしたい。

1. 伊勢と宇治山田

今日的に「伊勢」と呼ばれている地名は、広狭二つの空間的な範囲をさしているとともに、さらに何らかの意図性をもって「伊勢」と冠することでアピールがなされる一種の「記号」としての意味を持つ場合が見られる。これは「伊勢」が政治・経済的また社会・文化的な点で用いられる場合の諸状況によることと思われるが、歴史的な経緯もあり、いささか複雑な状況である。それらを整理、紐解くことは容易にできないが、簡単にふれておきたい。

律令制下における「伊勢」といえば伊勢国を指している。延喜式（民部上）によれば東海道の一国として「伊勢国_天」として「伊賀国_下」「志摩国_下」などとともにある。この三国と南海道の紀伊国の牟婁郡の東部地域とが現在の三重県を構成している。また延喜式卷（神祇4）は「伊勢太神宮」について規定するが、この伊勢も伊勢国である。

ここで「伊勢」と称される場合には、現在の伊勢市を越えた範囲を指しており、例えば伊勢音頭と呼ばれる民謡の歌詞に「伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ」という一節があるが、津（安濃津・現在の津市）との関係で登場する伊勢は、伊勢市ではなく伊勢国のことである。江

戸時代に江戸で活動した「伊勢商人」も、その出身は松阪市であり、三井家発祥の地は松阪市本町にある。但し、江戸の各地に稲荷等とともに多数あったという「伊勢屋」が必ずしも伊勢国出身者に限られていたことではない。こうした点で伊勢を冠する用語をいくつか紹介すると、伊勢海、伊勢路、伊勢海老、伊勢ウドン、伊勢太神楽、伊勢暦などあげられようが、「伊勢神宮」とのより近い関わりのあるのは、伊勢路（伊勢神宮へ到達する道、参宮街道とも総称される）、伊勢暦（御師が檀家へ持参した土産：現在の「神宮暦」とは発行主体・頒布方法・内容など異なる）、伊勢太神楽（伊勢神宮への祈願に奉納された神楽の発展形態とされるが、現在は桑名市大夫町を本拠とし各地を順舞する組織がある）ということになる。

すなわち、「伊勢」という場合には、多くの意味を含んでいることがあり、使用されている場合にはいさかさ留意する必要がある、このことは研究上でも用いられる「伊勢信仰」（「伊勢神宮を対象とする信仰現象」としておく）の「伊勢」も多義的になっていることと併せ考える必要がある。

さて、現在の伊勢市は、平成17（2005）年11月1日に伊勢市・小俣町・御園村・二見町の1市3町の合併により成立した新「伊勢市」である。伊勢市の呼称は比較的新しく、昭和30（1955）年1月1日に旧来の「宇治山田市」（明治39〈1906〉年・9月1日市制施行）を改称したもので、その前身である宇治山田町は明治22（1889）年に成立している。その核となるのが、皇大神宮（内宮）鎮座の宇治の町と豊受大神宮（外宮）鎮座の山田の町である。宇治・山田の呼称は現在でも年配の人たちにはなじみで、「山田へ買い物に行く」といえば少し晴れやかな町へ出かける含意で用いられることも稀にある。両地名は、近鉄「宇治山田駅」、JR「山田上り駅」のように公共施設に留められている。

宇治よりも山田の方が面積は広く、延喜太神宮式（巻

4) によれば、

伊勢太神宮 三座（天照太神一座・相殿神二座）
在_二度会郡宇治郷五十鈴川上_一
度会宮 四座（豊受太神一座・相殿神三座）在_二度
会郡沼木郷山田原_一、去_二太神宮西_一七里

とあって、両所は度会郡内の「宇治郷五十鈴川上」と「沼木郷山田原」と見え、前者が川上（かわのほとり）とするのに対して後者は原と認識されてきた。

近世の伊勢市域は機能分化が認められ、内外宮の祠職や御師の住居が集中する宇治・山田と、物資の流通に役割を果たし蔵の街である河崎（昭和49（1959）年7月7日の「七夕豪雨・水害」による山田地域の大浸水以降、勢田川の河川拡張工事で多くの家屋が移転、撤去された）、両宮接界の地として歓楽街化した古市（この地域一帯を「長峰」「間の山」とも呼ぶ）、今日も宇治山田港のある神社（かみやしろ）及びかつては中近世における伊勢湾海運の中心地であった大湊（おおみなと）をそれぞれのまとまりとして捉えられる。神社及び大湊は、海上を利用した伊勢参宮を捉える場合に見逃せない港湾で、大湊は造船業が盛んであった。周辺集落は農業が中心の地域で、林業（前山町）や漁業（今一色・有滝・村松・大淀など）に従事する集落もある。

2. 宇治山田の社会組織と神宮の組織

こうした諸組織については、これまで諸研究がなされていると思われるが、時代的な変遷や職掌の消長と両者間の詳細な関係実態についての解明は今後のことかと考えられる。特に近代以降の伊勢の社会状況を考える上でも、明治4（1871）年の神宮制度改革前後の様相を知る材料としては、『神宮・明治百年史』（神宮司庁・昭和43年）、『神宮御師資料』（皇學館大学史料編纂所編、1輯・内宮篇、1～4輯・外宮篇、7輯・福嶋御塩焼大夫文書、8輯・八幡朝見神社所蔵福嶋御塩焼大夫文書）に収載の関係資料があるが、個別の御師に関する資料はまだまだ明らかになっておらず、その発掘や活用のための分析視角・方法など今後もっと議論されることが必要といえよう。

宇治山田の社会組織については『宇治山田市史』（上巻、昭和4・1929年）が参考となり、神宮の組織については『神宮要綱』（神宮司庁編、昭和4年）に掲載の解説が便利となる。なお神宮の職掌については藺田守良『神宮典

略』中編〈大神宮叢書〉にそれぞれの沿革など詳しいが、内容を整理一覧できる資料作成には至っていない。しかし、御師廃止後の状況を探っていく上でも、後で紹介する階層化された師職と神宮職掌との関係性のみならず、横のつながり（たとえば親戚・縁者関係）で、如何に変革期に対応したのか、またしてきたのかを丹念に検証するためには必要な作業かと思う。この点でも、本科研で調査を進めている岩井田家資料の重要性が更に明らかとなってこよう。

さて、神宮の制度改革は伊勢の町に大きな変化をもたらしたが、宗教的な関係では、明治初年の神仏分離、廃寺、神葬祭への転換など注目点がある。なかでも御師職の廃止は大きな出来事であり、岩井田家も神宮の職掌上は「大物忌父職」の一騰（トップ）であるとともに師職をつとめていた。

明治初年の師職（御師）数について、西川順土が『旧師職総人名其他取調帳』（明治4年時の状況を12年に調べたもの、三重県神社庁蔵）によって明らかにしたところによれば、内宮の御師（宇治御師）が190戸（内、絶家が19戸）、外宮側の御師（山田御師）が480戸（内、絶家45戸）で、配札数は内宮方で110万4381戸、外宮方で約456万戸と推定でき、外宮方が約4倍となっている（明治4年7月当時）（西川「廃止前後の御師」、『歴史手帖』12巻7号、昭和59年7月）。この取調帳は、御師廃止以降の救済策を立てる上で作成された資料であるが、松木素彦によれば、明治4年頃の宇治・山田の戸数を約6千と見積って、師職数を600戸とした上で、一つの師職家に従事する家数を5戸と見なせば、約3千戸、すなわち半数の家が失職したこととなるという（松木「明治四年の神宮御改正」『神宮・明治百年史』上巻、昭和62年、147頁）。御師活動の柱である配札による収入は町の人々の生計上、重要な要素であり、また社会変革期における参宮客の減少は、古市など遊興街への影響も推し量られる。

第1回研究会において、山田では檀家数の多い有力御師であった三日市大夫・龍大夫邸跡をはじめ、保存活動が行われている丸岡大夫邸を訪れ、宇治では岩井田大夫・浦田大夫両家の外観を確認したが、廃止前の御師には当地における家格区分との関係があった。

『宇治山田市史』（上巻・第3家格編第1章総説）によれば、当地の家格について家筋、職務上から大略、(1) 宮司家、(2) 神宮家、(3) 会合年寄家（宇治）・三方年寄家（山田）、(4) 町年寄家（山田）、(5) 平師職、(6) 殿原（とのぼら）、(7) 仲間（ちゅうげん）としている。市史の記述に

依りながら概略を紹介すると次の通りである。

(1)の宮司家(河辺家の世襲となっていた)は、家領90石余で師職は務めていない。(2)「神宮家」は、明治の神宮改革まで内・外両宮に分かれており、外宮は度会姓、内宮は荒木田姓を名乗っていた。神宮の職制上、大きく禰宜及びその被官である内人・物忌・小内人・雑任の各職があり、さらに各職も内部的に分かれていた。「禰宜職」は正員禰宜(各宮10名)、と権禰宜(官符権禰宜=公門と通称、擬符権禰宜、六位権禰宜、一代権禰宜)とがあり、さらにその権禰宜も、正員禰宜に対して「権任」とか「権官」と称されるが、これも重代権任(=正員禰宜になれる家系)と譜代権任(=正員禰宜になれない。地下権任とも称す。地下権任は神宮に付かず、地下の異姓人(荒木田・度会姓以外)と同様、在地のことにあづかる。近世は名目上の存在)という区分があるなど複雑である。

物忌職について内宮を中心に説明を加えると、時代的消長はあるが、大物忌・大物忌父・副大物忌父・宮守物忌・宮守物忌父・副宮守物忌父・地祭物忌・地祭物忌父・副地祭物忌父・酒作物忌・酒作内人(古くは「酒作物忌父」)・清酒作物忌・清酒作内人(古くは「清酒作物忌父」)・御塩焼物忌・御塩焼物忌父・土師器作物忌・宇爾御器長・山向物忌・山向内人・母良(大物忌の介助)・物忌馳使の各職があった(『神宮典略』)。明治の改革まで、内外両宮域内に「子良館(こらかん)」という施設があり、大物忌(童女1名、後世「子良」と称した)と介助の「母良(もら)」1名とが起居し(近世では2人は擬制的な親子関係)、神楽の執行、配札を行っていたが、師職としての役割はなかった。岩井田家が物忌父職にあったことは紹介したが、以下の諸物忌職も御師を営んでいたわけで、これらの関係の整理は、神宮家以下の家格区分にも及ぶことで、まずは『神宮御師資料』(内宮篇、外宮篇1～3)に依りながら整理を進める必要があるが、データ処理作業が煩雑でなかなか着手しづらいところがある。

なお、神宮家においては、所領から扶持米が得られるが、私的に師職を営んでいたわけで、その檀家が禁裏御所(内宮は藤波家、外宮は桧垣家)、諸大名から全国各地に及んでいたわけである。なお、将軍家御師の山本家(内宮)は「宇治会合年寄家」で、春木家(外宮)は「三方会合年寄家」であった。

(3)会合年寄家は、「宇治会合年寄」(内宮)、[山田]三方年寄家(外宮)で自治組織の年寄役で行政権を有していた。正六位上が極位で、神宮家より養子を得て五位権

禰宜を世襲する者(叙爵家と称する)が多かった。家領、役料はなく、師職による収入が主となる。会合所の位置についてであるが、宇治のそれは、宇治橋近くの「湊御神符奉製所」に旧跡碑が建てられており、山田の方は、県道37号線、一之木1丁目の道路沿いに石碑が建てられている。以前は「京家」という料理店がありその板塀沿いに建てられていた記憶があるが、移動されたようである。

(4)町年寄家は、山田にのみあり、幕末時は200余軒で、うち17軒は内宮権禰宜家(堤・岡田・榎倉・林・高田・村山・松尾・中西・坂)、33軒は外宮権禰宜で「叙爵家」と称された。家領、役料はなく(例外もあった)、師職を主とする者である。神宮の内人、物忌職の者もあったとされている。

(5)平師職は、会合年寄、町年寄の支配を受けて、師職を専業とする者で神宮の祠職ではない。神宮家・年寄家などの家来格となる必要を慣例とした。家領はなく、師職として檀家を持つ者もいるが多くは代官・手代として檀家廻りを業とするとともに、商売などを営んでいた。

(6)殿原は、「師職の檀家廻りをする手代・諸職人・商人の中にて、名字を名宣る身分の者の総称」(市史)とのことで、中には平師職になる者もあったという。「神楽役人」(御師邸の神楽殿で行われる太神楽などの演奏を担当する)の多くはこの立場から出ており、検校・勾当・法眼・法橋・山伏も殿原の位置であった。(7)仲間は、「諸職人・商人・農作・日雇等」(市史)に就いていた。

以上の外、山田には「宮司役人」「羽書取締役」の新格が出来ていた。岩井田家資料では、師職廃止後も旧来の檀家地を巡回していた岡部新七郎という人物の存在が見られるが、どのような経緯で同家との関係が出来上がっていたかなどは未詳で、他家における類似の事情も情報が無く、今後の課題ではある。

3. 今後の検討と関心事項

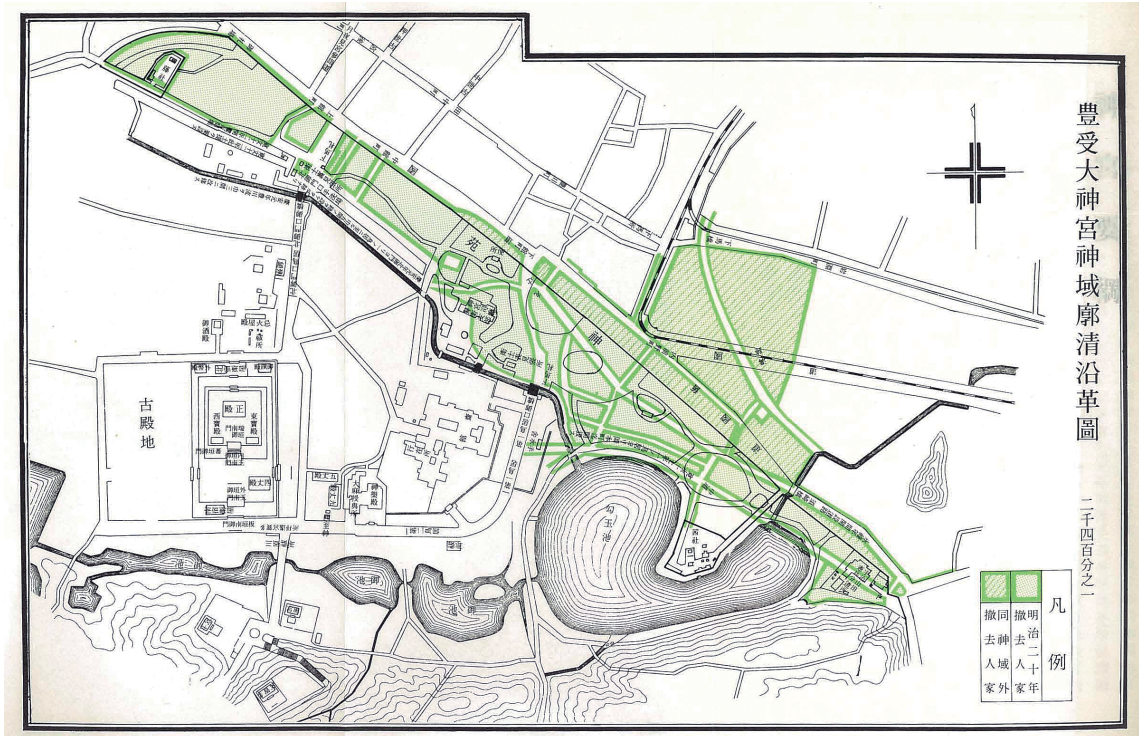
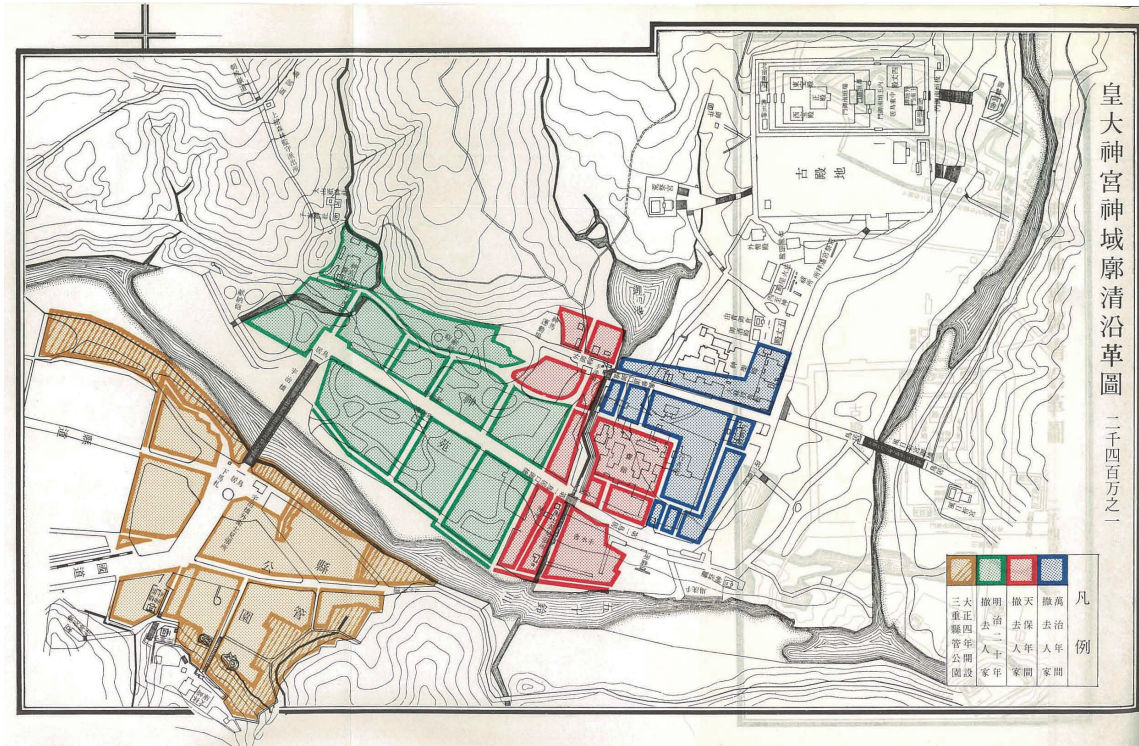
岩井田家資料目録作成への協力が主となるが、宇治・山田における社会の特性を理解するうえで2点ほど調べを進めたいことがある。1点は、神宮々域と町との空間的な区分の変遷である。既に多くの指摘がなされているように、現在、内宮々域と町とを区分する表象は五十鈴川に架かる宇治橋となっているが、これは明治20(1887)年の神域廓清により、火除橋の外側(宮中より見て)に密集していた御師の館や民家が移転された結果である。更に古く遡れば、現在の内宮神楽殿付近まで人家があっ

た。万治元（1658）年、天保年間（1831～1845）に徐々にそれらは宮中より外へ出されて行った。この経緯をできるだけ抑えつつ、近代以降の変化の状況を見ることである。それに関して「火除橋」とは、宮中（正殿域）への外部からの類火を防ぐ意味なのか、宮中における「火」の齟忌に関わることなのかを考えてみたい。

もう1点は、宇治と山田および両宮接界の地、古市における内的諸結合と分化にかかる社寺や儀礼について、

それぞれの機能を見ることである。宇治の町については既に先行研究があるが、山田及び古市については、特に近代以降の問題もふくめ神宮とのかかわりにおいて今後資料収集を含め検討したい。

*本稿は、第2回研究会での口頭報告をもとに文章化したものである。



（上掲2図は『神宮要綱付録：内外宮神域内廓清沿革図』より転載）

伊勢をはなれた御師家族の震災経験

関東大震災の安否を知らせる書簡から

濱千代 早由美

はじめに

岩井田家資料には、様々な立場でやりとりされた書簡が含まれている。御師として北関東の檀家と間でのやり取りされたもの、地域社会における自治組織の一員としてやり取りされたもの、御師廃絶後、下宿屋の主人として店子であった神宮皇學館の学生やその家族との間でやり取りされたもの点数が目立つ。これらの書簡の中に、数は少ないものの、伊勢を離れた家族から伊勢の岩井田家に送られてきたものが含まれている。本稿では、関東大震災から1ヶ月後の大正12年（1923）10月に、東京で被災した家族から届いた書簡をもとに、伊勢を離れて東京に暮らす出郷者としての元御師たちの姿を知りたい。

1. 御師廃絶後の岩井田家

御師は伊勢参宮隆盛の重要な立役者であったが、明治4年（1871）の神宮制度改革の断行によって廃絶することとなった。明治4年の御師数については、外宮側の御師（山田御師）が480戸（うち、絶家45戸）内宮側の御師（宇治御師）が190戸（うち、絶家が19戸）と推定される〔西川 1984年〕。このとき、約600戸の御師と、御師のもとで働いていた人々が同時に失職に追い込まれたということになる。

しかし、御師制度廃止以後、御師と御師に関わった人々の暮らしがどのようなものであったのかは、十分に明らかになってはいない。宇治と山田の街で神宮との直接的な関わりを持った者はわずかで、旅館を開業するなど、参宮に何らかの形で関与する者もあれば、桑畑開発などの殖産事業の開始や他職への転業などの道を探った者もあった。また、伊勢を離れる選択をした者もいた。

岩井田家の場合、岩井田家第16代当主・尚行は、神宮改革によって一度は皇大神宮権禰宜の職務を免ぜられた。しかし、新制度の中で豊受大神宮主典に再雇用され、後には権禰宜となり、大麻頒布の規則づくり等、近代の

神宮改革にもなう制度再編にも関わった〔岩井田家所蔵資料調査チーム岩井田家未公開資料特別展図録編集WG編 2014年〕。このように、尚行は神宮改革が断行された後の新しいシステムの中でも、活躍の場を得ることができた。尚行は養子として駿蔵を迎え、この人物が第17代当主となるが、神宮との直接的関わりは尚行で途絶えることになる。

本稿で紹介する書簡は、大正12年（1923）10月9日の日付があり、駿蔵の子で第18代目当主となる尚文から、祖母である岩井田こま¹宛に関東大震災後の安否を知らせるものである。この頃、岩井田家では神宮に奉職する者がいなくなっており、尚文の父・駿蔵は愛知県名古屋市富士塚町に居を構え、「私立名古屋商業学校」に勤務していた。一方、大正10年代の伊勢の岩井田家は、こまが神宮皇學館の学生を寄宿させつつ守っていた。御師廃絶後も、北関東の檀家とのやり取りは続いていたが、徐々に御師活動が終わりを迎えようとしていた。

2. 伊勢を離れた御師たち

出郷者としての在京御師

明治期の日本全体に目を向けてみると、近代以降、東京や大阪といった大都市に居住するようになった出郷者・地方出身者は、明治中頃から目立ちはじめるようになった。彼らは、「立身出世」を目指して、あるいはやむにやまれぬ理由から、大都市を目指した。書生、官吏、兵士、商家の丁稚、職人の徒弟、女中、工場労働者、「都市下層民」などが、明治初め頃の「出郷者」であった。日清・日露戦争後の殖産興業期を経て、資本主義体制が整うと、農村から都市に向かう「向都離村」の傾向はますます強まった〔高橋 1985年〕。

「向都離村」という言葉が示すように、出郷者についての研究は、都市－農山漁村関係を前提としてすすめられてきた²。伊勢から東京を目指した御師が、出郷者研究の想定するようなムラからの出郷者であったのかどうか

については一考を要するものの、彼らもまた、新天地に道を求めたのである。

岩井田家の出郷者

尚文の父である駿蔵がどのような教育を受けたかについては、養子であることもあって、これまでの調査・研究では十分に明らかになっていないが、「私立名古屋商業学校」で化学の教鞭をとれるだけの高等教育を受けた人物であることは確かである。また、尚文は、他の岩井田家資料の記述を総合すると、明治33年(1900)生まれで、当時は20代前半であったと考えられる。大正8年(1919)頃、駿蔵が名古屋からこま宛に送った書簡に、尚文の病気と尚文の弟・清三の名古屋商業学校への受験準備のため、正月の伊勢への帰郷をひかえる旨が記されており、駿蔵が息子たちに対して相応の教育を受けさせたことが推察される。駿蔵・尚文の親子は、ともに近代教育を受け、大都市に職を求めた1人だったのではないだろうか。

尚文からの書簡の差し出しは、「王子抄紙部内研究所第一部 東京市牛込区市ヶ谷田町二ノ二八 中西方」からとなっている。これまでの調査から、印刷局につとめていた中西常真という親戚がいたことが明らかになっているので、この人物のもとに寄宿していたのであろう。

本資料には、このほかに印刷局について言及されている箇所が何カ所も認められる。これには、伊勢出身で、大蔵官僚から衆議院議員(立憲民政党)にまでなった池田敬八(明治7年(1874)～昭和38(1963))という人物が関与するところが大きい。資料中の、「印刷局の方も今局長洋行中ですが、…(後略)…」とある「局長」というのが、池田敬八である。池田は、大蔵省専売局事務官、専売局参事、専売局長官官房監理課長などを経て、1917年(大正6年)からは印刷局長を務めた。昭和3年(1928)、印刷局長を辞して、第16回衆議院議員総選挙に出馬し、当選。第17回、第18回でも再選された。池田は、伊勢出身者の専売局、印刷局への就職の斡旋にも力を発揮しており[太田 2016年]、中西常真や尚文も、池田の斡旋によって東京での職を得たようである。

同郷者ネットワークの形成

出郷者は、故郷をともにする都市居住者たちの集まりである「同郷者集団」を形成したが、伊勢を含む三重県度会郡出身者たちもまた、同郷者集団として「度会郷友会」を形成し、明治27年(1894)から50年にわたって会誌『度会』を刊行していた。

この会結成の発端は、明治25年(1892)に郷里へ帰省した在京学生の茶話会である。宇治山田(現伊勢市域)出身の在京学生が大半を占めるものだったが、明治27年3月に、在京学生だけでなく、度会郡全体の団体として度会郷友会が結成された[太田 2016年]。先述の池田敬八は、度会郷友会結成時、東京帝国大学生として、発起人に名を連ねている³。

明治20年代から30年代にかけて、全国的に地方からの東京遊学が盛んになるが、同郷者集団が組織化される以前に、すでに在京青年たちが、小規模ながらも互助的な生活共同体を形成していたことは、すでに指摘されている[河西 1992年、前田 2002年]。池田らも、同郷者集団の流行の中で、会を発足させたことが推察される。本稿で問題とする在京元御師たちも、何らかの形でこの会に関わったようだが、度会郷友会については、太田未帆[太田 2016年]による研究があるのみで、今後、詳細な研究が待たれるところである。

3. 関東大震災発生時の在京御師

大正12年(1923)9月1日、関東大震災発生が発生し、在京元御師たちも被災した。本稿で紹介する震災発生から1ヶ月後に届いた被災報告の中に、東京で岩井田尚文が関わりを持っていた元御師について言及されている。

在京の「我共一家一族」として、小林、福村、山本、中西、刀祢館の元内宮御師の名が挙げられ、「我共一家一族即ち小林方、福村様方、山本様方、中西様方、刀祢館様方皆誰にも怪我なく、家は焼けず居たのは全く平常からのおばあ様の神様に対する深き御信心からであると信じます。」と、その安否が報告されている。尚文が寄宿していた中西家は、大きな被害はなかったものの、近隣で火災が起こったため、家財をまとめ、電車線路や神社の境内に寝るなどの避難生活を余儀なくされている。東京では田舎のように隣近所と親しくつきあうということがなかったが、お互いに助け合うようになったことや、災害後は殊に泥棒が多くなるという噂があり、夜警を続けることになったことなど、避難状況が綴られている。

「我共一家一族」として名が挙げられ、こまに対して安否報告がなされた親戚は、全て元内宮御師である。つまり、彼らは同郷者であると同時に、親戚でもあった。これまでの岩井田家資料調査によって、幕末から明治・大正期にかけての岩井田家の姻戚関係は、伊勢の中でも、内宮を中心とした宇治の街に限定される傾向があったことが明らかになってきている[濱千代 2007年・2016年]。しかし、幕末期の親戚付き合いが分かる婚姻や葬

儀に関する資料には、本資料に挙げられている名前は見当たらない。明治・大正を経て、親戚としての付き合いが変化したのかどうか、「我共一家一族」としての付き合いが、在京という共通項によって深くなったものかどうかにについては、今後、留意していく必要があるが、伊勢としてのまとまりではなく、宇治としてのまとまりが、東京においても継続していることは確かである。

では、伊勢出身者による同郷者集団と、尚文が「我共一家一族」として捉えていた人々はどのような位置づけにあったのだろうか。先述の『度会』225号は、会員の被災状況、現住地、体験談などを掲載した「震災号」となっている⁴。書簡から「我共一家一族」のうち、1軒しか家が焼けていなかったという被災状況を把握することができるが、度会郷友会による被災状況調査には、岩井田はもちろん、小林、福村、山本、中西、刀祢館のいずれも記載がなく、刀祢館が226号で住所の記載があるのみである⁵。その理由をとくためには、今後、雑誌『度会』の記述内容の精査および在京御師についての調査が必要であることは言うまでもないが、大正10年代に東京に一定数の度会出身者のネットワークがあり、その中に外宮御師、内宮御師のネットワークが入り込みに存在していたことが推察される。少なくとも、尚文たち「我共一家一族」が、東京で助け合いながら、「なつかしい故山の姿町の形、殊に神聖な両宮の鎮座さるゝ天地」に思いをはせていたことについては、岩井田家資料から知ることができる。

4. 震災に関する記憶

近年、過去に発生した災害に関する記憶を「災害に関する記憶」資料としてとどめ、それにより得た教訓を将来的に生じるかもしれない大災害への対策に活かす取り組みが、各方面ですすめられているが⁶、本資料には、関東大震災を経験した当事者による震災の記憶として、興味深い記述がある。

その1点目は、震災関連死についての記述である。中西家の「龍」という人物が胃潰瘍のために亡くなったことが報告され、「地震の驚愕と戸外に寝たりしたのがその原因」であろうと推察している。先述の『度会』225号には、会員の被災体験が掲載されているが、このような震災関連死については把握されていない。

災害関連死は、1995年に発生した阪神・淡路大震災を契機として、災害弔慰金の可否を認定する必要から、公的に認められるようになった概念である。当然のことながら、災害と何らかの因果関係を持つ死は、阪神・淡

路大震災以前にも起こり得たのであり、本資料の記述は、その一例である。

また、当時の災害観についても記述がある。刀祢館正雄は、8月末に神戸から東京に居を移してすぐに震災に見舞われた。「神戸と云ふ所は殆ど地震のない所ださうです。」とあり、当時の災害に関する認識では、その約70年後、神戸を大規模な震災が襲うことになることは想像もつかなかったことが分かる。

3点目に、災害後の流言についての記述がある。災害発生後に根拠不確かなうわさ話、流言が出回ることについては、様々な方面から指摘されているが、関東大震災発生後には、「朝鮮人が井戸の水に毒を入れたらしい」等の流言が出回った。書簡には、「いや私達男子は朝鮮人放火、或は井戸に毒を入れる、の噂に起きて、夜警をしなければならぬのでした。」とあり、流言の流布とそれに応じる行動を確認することができる。しかし、とくに「夜警」以上の言及はなく、むしろ泥棒が横行することを恐れて5月まで夜警を継続することになったようである。

以上のような一被災者の災害の記憶が記されているのも、本資料の価値であろう。

5. 御師の経験した近代 まとめにかえて

本資料は、関東大震災の被災状況を知らせる内容であるが、御師廃絶後の彼らが、どのように近代を経験したのかを知る資料としてみる事も可能である。

例えば、便箋5枚にペン書きでしたためられ、新旧の仮名遣いが混ざっているなど、大正という時代のリテラシーを知る上でも興味が引かれる。

また、東京の都市形成という側面からみれば、これもまた興味深い記述がみられる。尚文が寄宿していた中西家は無事だったものの、勤務先が焼けた農商務省の事務所になるために王子（現北区）の抄紙部に移転することになった。そうなると、市ヶ谷の中西家からは通勤に不便である。そこで、震災後の諸事が落ち着いたら、王子のすぐ近くである「瀧の川（現北区滝野川）」に居を構えていた画家の信五郎宅から通うことを知らせている。

滝野川の金剛寺（紅葉寺）は、江戸時代から紅葉の名所として知られるが、「之からの秋の郊外は景色も住心地もよくかへって喜んで居ります。瀧の川は紅葉の名所で、よく人が遊びに行く所です。」と記している。滝野川は、鉄道敷設に伴う駅の開設⁷、工場の開設⁸や日露戦争を契機とする軍施設の移転⁹によって開発が進められたが、尚文の書簡からは、大正10年代においても、ま

だ「都心から遊びに行く郊外」という位置づけだったことが分かる。滝野川のあたりは台地であったために、ほとんど震災の被害を受けず、震災後、被災者の移住先となってさらに住宅地化が進み、昭和5年頃には、田畑がなくなった[北区史編纂調査会 1992年]。尚文の書簡から、近代化・都市化が進む滝野川周辺に、何人かの旧御師が住んでいたことが分かっており、度会郷友会の名簿からも、何名かの名前を認めることができる。伊勢から東京に出た彼らは、東京の近代化のまっただ中にいたのである。

明治期の近代の波に翻弄されたとも言える元御師たちが、日本社会の急激な産業化・都市化の中で、どのように生きたのかについては、ほとんど分かっていない。関連資料を重ね合わせることによって、彼らを「近代の隙間」から見つけ出す作業を、今後も継続する必要がある。

参考文献

- 鯉坂学 『都市移住者の社会学的研究－『都市同郷団体の研究』増補改題－』法律文化社（2009年）
- 岩井田家所蔵資料調査チーム岩井田家未公開資料特別展図録編集WG編 『平成23～25年度文部科学省科学研究費・基盤研究（C）一般（課題番号23520088）「近代の伊勢神宮改革と御師制度廃止に伴う伊勢信仰の相克に関する基礎的研究」成果報告 岩井田家未公開資料特別展 館町の御師』（2014年）
- 太田未帆 「近代同郷者団体の活動－度会郷友会と雑誌『度会』から－」（『ふびと』67、2016年）
- 河西英通 「在京青年会の位置と論理」（『天皇制国家の統合と支配』文理閣、1992年）
- 北区史編纂調査会 『北区史 民俗編1』北区（1992年）
- 高橋勇悦 「都会人とその故郷」（鈴木広、高橋勇悦、篠原隆弘編『リーディングス日本の社会学 7 都市』東京大学出版会、1985年）
- 成田龍一 『「故郷」という物語 都市空間の歴史学』（吉川弘文館、1998年）
- 成田龍一 「都市空間と『故郷』（成田龍一、藤井淑禎、安井眞奈美、内田隆三、岩田重則『故郷の喪失と再生』青弓社、2000年）
- 西川順土 「廃止前後の御師」（『歴史手帖』12-7、1984年）
- 濱千代早由美 「カメルーン北西部州、バメンダにおけるバフツ首長国出身者のアソシエーション－『マંンジョン』を中心として－」（『アフリカ伝統王国研究

- 2 アフリカにおける伝統王国の社会変化の比較研究－特に、国民社会形成とのかかわり－』（2001年）
- 濱千代早由美 「幕末期における伊勢神宮師職の葬儀『一萬得輝神主御逝去ニ付萬控』、『徳輝神主列帳』（『三重県史研究』22、2007年）
- 濱千代早由美 「幕末期の伊勢・宇治における御師家の縁組みにみるケガレ観「廉引取之引留」をめぐって」（『女性と経験』41、2016年）
- 前田俊一郎 「都市における青年と故郷－寄宿舎・学生寮にみる同郷者結合を中心として－」（松崎憲三編『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院2002年）
- 松崎憲三編 「向都離村と帰去来情緒」（松崎憲三編『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院、2002年）
- 松崎憲三 「県人会と同郷団体」（新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学① 都市とふるさと』吉川弘文館、2006年）
- 松本通晴・丸木恵祐編 『都市移住の社会学』世界思想社（1994年）

注

- 1 「こま」は、駒子と記されることもあるが、岩井田家第16代当主・尚行の継妻である。弘化元年（1844）生まれで、昭和元年（1926）に83歳で亡くなっている。
- 2 出身を同じくする人々の結社についての研究は、社会学、地理学、歴史学、民俗学、文化人類学などで研究の蓄積がある。筆者のこの分野での研究については、西アフリカ・カメルーンの都市（バメンダ）における同郷集団による結社を中心としたurban-village関係についての報告がある[濱千代 2001年]。
- 3 溝口鹿次郎、村井亥三、亀谷環、岡田織之助、池田敬八の5名が発起人となっている[太田 2016年]。度会郷友会の入会資格は、宇治山田市及び度会郡出身者もしくは「同郷二関係アル者」で、在京者だけでなく、朝鮮、満州、台湾、樺太などまでも広く網羅するものだった。
- 4 本来、大正12年（1923）9月に刊行される予定であったところ、震災のために翌年2月まで刊行が遅れている。
- 5 後述するように、刀祢館正雄の神戸から東京への転居直後に震災が発生したという事情もあったと考えられる。
- 6 例えば、首都圏形成史研究会では、災害を通じて首都と首都圏の近代史を考えることを目的に、サブ部会として、2016年に「首都圏災害史研究会」を設立し、「災害史」に関する首都圏の自治体史等を精査し、年表を作成するという作業が進められている。この作業は、記録されたものから、「記憶」を拾い上げる作業とも言えよう。

- 7 明治 16 年（1883）に日本鉄道株式会社が、上野・熊谷間を開通し、王子駅を開設した。次いで、明治 18 年（1885）に、赤羽・品川間を開通し、板橋駅を開設した。明治 44 年（1911）、王子電気軌道が大塚から飛鳥山間の軌道を開通すると、宅地としての発展が始まっている。
- 8 洋式紡績工場が明治 5 年（1872）から操業を開始し、明治 6 年（1873）には、王子製紙の前身である抄紙会社が開設された。大正期には、製麻、製糸、製紙関係の工場に通う勤め人が定住するようになった。
- 9 日露戦争を契機として、陸軍省は明治 38 年（1905）に小石川の東砲兵工廠の銃砲製造所を下十条に移転し、その関連かららいこうば雷汞場（雷管用の爆薬の製造および装填）を滝野川に設置した〔北区史編纂調査会 1992 年〕。

うまく都合出来たら帰るかも知れませんが一寸帰れないだらうと思ます一層やめられてもい、覚悟なら、かまいませんが、しかし、こんな悲惨な有様を實際見るとあさましく又皆様方の年とられ、たよりない生活を考え気が、りりとしてなつかしい故山の姿町の形、殊に神聖な両宮の鎮座さる、天地を想像すると、たまらなく帰りたくなり、一層暫く帰って後再拳を計らうかとも考へますが、昨今暫く天の成行にまかさうと思ます。もう局の人でも大分待命になったひとがあります

祖母様

尚文より

【封筒裏】

印刷局

王子抄紙部内研究所第一部

東京市牛込区市ヶ谷田町

二ノ二八 中西方

岩井田尚文

十月九日

注

(一) 手代と元下宿生に「天津」という人物がいる。本文からは、どちらの人物かは判別できない。

(二) 中西家の家族か。

(三) いずれも内宮の元御師である。中西常真は、印刷局につとめていた親戚で、尚文はこの家の下宿していた。

(四) 池田敬八。内閣印刷局長として、欧米視察中に関東大震災が起こり、視察日程を切り上げて帰国した。

(五) 現東京都北区滝野川。

凡例

一、岩井田家所蔵にかかる「書簡」(資料No.⑤5841、洋紙便箋五枚にペン書き)の全文翻刻である。

二、翻刻にあたっては、原文に忠実にあるようつとめたが、旧字体、異体字は通行の文字に改めた。

12年10月9日

先日ハ天津(一)様より御葉書いたゞき有難く厚く御礼申上下さいませ。震災後既に一ヶ月有餘詳報は日々新聞紙に精しく掲げられて御存知でせうが此度の事件程に痛ましい惨事は又と少からうと存じます。色々と申上た事は、たくさん有りますが、後始末やら、そこへ又龍(二)様の御逝去やらで、何かと取込んで居まして早速のたよりも、後で申訳ありません。何しろ、今度のこんな大震災に、我共一家一族即ち小林方、福村様方、山本様方、中西様方、刀拵館様方(三)皆誰にも怪我なく、家は焼けず居たのは全く平常からのおばあ様の神様に對する深き御信心からであると信じます。唯一人中西三郎様(又用尚様)宅丈が下谷にあつたものですから焼けた丈でした。刀拵館正雄様は八月末から神戸の勝田汽船の方をよされ、東京朝日へ入社せられた許であつたものですから大変驚ろいて居られました。神戸と云ふ所は殆ど地震のない所ださうです。家はこの中西のすぐ後の方に、いゝのがありましたのでそこにきまりました。高台で前に外濠を見下し暑い夏の夜でも涼しい風がそよ／＼入ります。早く刀拵館の伯父が見舞に来て下さったものですから、山田へは私達の状況を精しく御知らせする事が出来好都合でした。私方は地震で家はそんなに毀れませんでしたけれども二日の夜には火が余程近く来まして烟や火粉が降って来たものですから家財は一通まとめました、さうして私達は裏の電車線路に寝ました。一日の夜、三、四日の夜は裏のお稲荷様の境内に寝ました。いや私達男子は朝鮮人放火、

或は井戸に毒を入れる、の噂に起きて、夜警をしなければならぬのでした。食べる物は玄米の握飯ですし、ほんとうに生まれて初めての、辛い而し尊い経験でした。皆共同して事に當りました。東京では近所、隣と云つても親しい家は親しいですが、田舎の様にどこも、親しくつきあふと云ふ様な点は薄かったですがこの事があつてから、御互に融通し合ひ助けました。災害後は殊に泥棒が多くなると云ふ噂に夜警は尚来年の五月頃迄続けるさうです。御気毒なのは龍様です。やはり地震の驚愕と戸外に寝たりしたのがその原因となつて居るのではなからうかと存じます。中気の方は以前とそんなに病情に変はなかつたのですが、胃潰瘍の為にならなりました。病人でなくても連日の心配や疲労や看病の為に身体を悪くし、半分病人です。私もとう／＼この四月から胃腸をこわし、風邪を引いて寝てしまひました。あちら、こちら、沢山手紙を書かなければならぬ所があつて、すまないのですが、やつと今日少しくよく、なつたものですから第一にかきました。印刷局の方も今局長(四)洋行中ですが、取敢へず市内の印刷屋の信すべき大きな所へ局監督の下に、夫々依頼し、又大坂の方の大会社へも依頼しました。今の所は焼けた農商務省の事務所になると云ふので、我等は王子の抄紙部の方へ移される事になり今移転中です。そうなると、こゝからでは朝の始が早く、通勤するのが大変ですから、向ふの方を尋ねました処、幸ひ龍様の御息で、画家の信五郎様が是非御出なさいといはれるので御言葉に甘へ参らうかと思つてます。家は瀧の川(五)で王子のすぐ近くです。又小林、福村方へも、大変近いです。而し今こちらの家は龍様なくなれば、常夫様、康平様も奥様をもたれ家を別にして、居られ、且常夫様は又今日より一ヶ月許神戸の方に会社の用で御出になりまして、家には男手がありませんから、暫く朝は辛いですが、こゝから通勤しやうと思つて居ります。之からの秋の郊外は景色も住心地もよくかへつて喜んで居ります。瀧の川は紅葉の名所で、よく人が遊びに行く所です。此間宇治今在家の人で山田へ帰ると云ふ人がありました、尋ねて行きましたから、私も、こんな事があつて、色々御話したい事は書きず外にすこし用もありますから暇がとれたら帰りたいとは思ひますが、今こうして、移転の際に一週間も休み、尚其上、国へ帰つて休めば、今正に整理の始まらんとする時に際し、いくら池田様の御鼻屑でも、大変危いですから、或は

資料紹介「尚武出産祝」

田口 祐子

1. 岩井田家所蔵資料における本資料の位置づけ

伊勢の旧御師であり、神宮（内宮）の祠職（大物忌父）家であった岩井田家の所蔵資料は、①御師活動、②御師廃絶後の殖産興業、下宿業、③神宮に関する資料と④家乗に分けられる。本稿では、特に④に含まれる岩井田家で営まれた産育儀礼に関する音物帳について紹介する。

取り上げる音物帳、「尚武出産祝」（明治36年2月25日）は岩井田家に生まれた子ども、「尚武」の出産にともなう贈答に関する覚え書きである。

岩井田家所蔵資料は現在整理作業が進んでいるが、子どもの誕生や成長に関する産育儀礼に関する資料については、現時点で本資料同様の出産祝に関するもの（「尚文出産祝到来家之控」、「尚文祝おほへ」）と、養子縁組に関するもの（「駿蔵引取の際祝品到来家之控」、「駿蔵引取祝」）がみられる。このうち、駿蔵は岩井田家の第17代当主であり、尚文はその息子である。本稿の尚武は、この駿蔵の子であることから、尚文とは兄弟ということになる。

本資料も含まれる産育儀礼に関する資料類は、旧御師家・神宮祠職家といった特殊な状況（特別な家）におかれた岩井田家の家庭行事の記録として、そして明治30年代の宇治地区の出産にともなう贈答慣行を知る上でも貴重な資料であるといえる。

本稿では、出産に関する贈答慣行の全国的な状況、また宇治地区における本資料の位置づけを確認した上で、本資料における、贈答品の内容、贈答のやり取りの相手等について触れ、現時点での解釈を示した。観光の側面だけでなく、御師の家庭生活や在地の論理について目配りし、出産にともなう贈答の様子、旧御師・神宮祠職家であった岩井田家の地域社会における位置づけ、関係について概観した。

2. 本資料の内容

本資料の形態は、横帖一冊、表紙と墨付2丁からなる

（或いは、表紙を含め3丁）。

表紙に、「明治三六年二月廿五日 尚武出産祝 岩井田家」とあり、1丁表は「なわ引もち くばりさき」とし住所地と人（家）の名が書き連ねられており、1丁裏と2丁表は上段に品物名、中段に数量、下段に人（家）の名、そして住所についても記されている。このことから、出産に関する贈答品の覚え書き、控えのようなものであったと考えられる。

(1) 出産祝に関する覚え書きであることについて

出産直後の短期間に、ものの贈答をともなう祝いや見舞いは、全国的に多く行なわれてきた。本資料は、このような祝いの中のどのような祝いに関するものであったのだろうか。旧御師家であることに関連した特殊性があるのかを含め、この覚え書きの書かれた目的や背景について確認したい。

出産に関して行なわれる贈答をともなう祝いや見舞いの種類の数は多く、「三日祝い」「産見舞い」「お七夜」「命名祝い」など多くの呼称がみられる。これらの祝い等の記録をみると、時の流れや人の動きと共に、同呼称のものであっても内容が他のものを兼ねたり、一部あるいは大幅な変更がみられたりといった様子が見える。このため、呼称による分類は難しいといえる。

そこで、これらの出産後の儀礼における「贈答」に注目し、「贈答目的」「贈答者」という点から整理したところ、次のように大きく3つに分けることができた。

- ① 出産を知らせるため、出産した家の側から親戚・近隣へ贈り物をする。
- ② 出産を祝うために、親戚・近隣から出産した家に贈り物をする（主に産見舞い等）。
- ③ 出産の祝いをもらった家へ、母親・生児の側から祝返しを贈る（主に七夜・命名祝い等）。

本資料の1丁表はまず「なわ引もち くばりさき」となっており、これに続く記述は「なわ引もち」を配った

先の控えとなっていると考えられる。「伊勢では、七夜祝いや名付け祝いで配る餅をナワヒキモチとっていた」(『産育習俗語彙』)¹としていることと、上で挙げた3分類を併せて考えると③にあたる。以上から本資料は、産後7日目頃に行なわれる、七夜祝いや名付け祝いに関する贈答の覚え書きであったと考えられる。

(2) 伊勢における産後7日目頃の祝いに関するこれまでの記録と本資料

伊勢における産後7日目に行なわれた儀礼の記録について、自治体史等からみてみたい。

『伊勢市史 第8巻民俗編』(平成21年)には、昭和7年の一之木町のある家での出産前後の記録が掲載されている。出産後の肥立ちが順調であったこの家では、7日目に「命名祝」をして、産神をまつり、産婆を招き(他の招待者は不明)命名披露したこと、祝餅として一軒につき何個かずつを34軒に配ったことが記されている。「命名祝」は、この地域でナビラキ、シチャイワイ、ナワトリとも呼ばれ、通常、産婆・親戚の縁の濃い人(兄弟姉妹の女)、仲人(女)などを招いて、女性のみで会食する集まりだったという。

ここでは、餅の名称については記されていないが、『宇治山田市史 下巻』(昭和4年)では、名付けの式でもある七夜祝いで、親戚縁者に配る餅のことを「なわひき餅」とし(陣笠のような形をした餅であったという)、出産を祝って贈られた物の祝返しとしたことが述べられている。

印象深い「ナワヒキ」の名称については、『三重県史別編民俗』(平成24年)にて言及されている。「縄引」の名称をもつ儀礼が、中勢から南勢・志摩地方にかけてみられ、産後3日・5日・7日目等に「餅を配る」「産神・山の神を祀る」「産婆への謝礼をする」と説明されている。また、本来は7日目以前に産の忌明けの初期儀礼として、独自の儀礼が行なわれていたのではとしている。

以上のことより、表紙に続く1丁裏は、産後7日目頃の七夜・命名祝いで配られた「なわ引もち」の配り先の控えで、1丁裏と2丁表はそれに先立って岩井田家に送られた出産を祝う品々の控えであり、この地域の通常の習慣にのっとりたやりとりの覚え書きであったことがわかる。さらに出産祝いの送り主と「なわ引もち」配り先とは、ほぼ一致している点からも、贈答に関する控えであることが、再確認できる。

3. 資料の考察

贈答品の中で目立つものとして、「なわ引もち」と「うこん」がある。

「なわ引もち」については、本資料の内容を明らかにするものとして、前章で取り上げ述べた。ここでは、贈答品の1つである「うこん」を取り上げ考察したい。

また、覚え書きに贈答品とともに書き記された、贈った側と贈られた側の名からみえてくる社会関係についても考えてみたい。

(1) 出産を祝う贈答品としての「うこん」

親戚や近隣からの出産を祝う贈答品に関する覚え書きと考えられる1丁裏と2丁表(2章で行なった出産後の儀礼分類で②にあたる)は、「うこん」「やまともめん」「かなかしら」「ます」といった品を上段に、その数量を中段に、そして下段に贈り主名という形の記録となっている。品物のうち、「やまともめん」「かなかしら」²「ます」は、出産の祝いの主要な贈答品とされる、布類と魚介を中心とした食物である³。それでは「うこん」とは何であろうか。

上段に書かれた品物のうち、「うこん」は全16品中12品を占めている。宇治地区でどのような品が出産を祝って贈られたのかについては、残念ながら資料がないが、三重県全域でみると、「うこん」は出産を祝う贈答品としてたびたびみられる。例えば、多度町では明治36年に出産を祝って「うこん木綿」半反が3人から贈られたこと、明治44年に「黄紺」(うこんと思われる)7尺が贈られたとの記録が残っている(『多度町史 民俗』平成12年)。

出産を祝って贈られる「うこん」は、多度町の例にあるようにうこん染めの産着や反物を意味することが全国的に広くみられる。例えば、『産育習俗資料集成』⁴では「産見舞い」の贈り物について詳細に書かれた千葉県や長野県の報告で、男児はうこん木綿の反物や産着などを贈ると報告されている。

本資料における「うこん」については、産着や反物といった形状等は書かれていない。数量を示すとみられる部分には、「半」「二」の他「丈」とあり、ここから「うこん」が産着や反物であると推測できる。

出産を祝う贈答品が「うこん」に集中している点では、特殊性も感じられるが、先述したように明治の頃には、出産を祝ってうこん染めの産着や反物を贈ることが一般的であったことから、「なわ引もち」同様、「うこん」もこの地方の通常の習慣にのっとりたものであったと考えられる。

(2) 覚え書きにみられる社会的関係について

覚え書きの1丁表の餅配り先と、1丁裏と2丁表の贈り主とでは、ほぼ姓名や家名が一致しているとした。これらにみられる贈答のやりとりには、贈る側と贈られる側の均衡を保つ意味合いがあり、だれがどのようなものを贈ったか、あるいは受けとったかについて、漏れがないように記録を取っておく必要があったと考えられる。そのための記録として、本稿で取り上げる出産祝いの音物帳があったといえよう。出産祝いに関する贈答のやりとりの相手は、一般的に親戚・近隣の者に限られていたと考えられるが、社会的バランスの保持から、本資料においても贈答の範囲はこの親戚・近隣の者で厳密に決められていたといえる。

本資料の記録にある家名について確認したい。「旧御師岩井田家右近家系図」⁵には、古くは文明期に当主であった岩井田尚重が横地家からの養子であったこと、次男の延重は今度は横地家に養子に出されたことについての記述がみられる。横地家については配り先と贈り主の両方に記載されており、幕末から御師廃止の明治初期にいたる実状を記録した『神宮御師資料-内宮篇-』⁶から旧御師家であることを確認できる。

この『神宮御師資料-内宮篇-』によれば、本資料にあるすべての家名のうち、13の家が旧御師家であることがわかる。詳しい家名は、横地、澤瀉、浦田、十文字、玉串、蓬萊、久保、谷崎、岡野、田中、岡田、横橋、孫福である⁷。また、すでに翻刻作業が完了している所蔵資料のうち、岩井田家16代尚行と浦田家娘廉子の婚姻にまつわる記録である「廉引取之引留」では、嫁方の浦田家の他、参加者の中の親類として、挙げられている6軒の中で、本資料にある蓬萊家、横地家、孫福家の3軒の名がみられる⁸。

このうち、横地家の横地宰記は婚姻の後見人として、三々九度を差配し、その後の15代当主岩井田徳輝危篤の際にも駆けつけ、徳輝より岩井田家の後見的存在となつてほしいとの遺言を残されている。

本資料にみられる親戚・近隣関係の大半が旧御師で占められていたことから、「宇治の祭祀と政治は、地縁と婚姻関係によって強化される」⁹といった、旧御師間の緊密な社会・親族関係を知ることができる。そして御師制度の廃止後30年以上たった後も、依然としてこの関係が続いていたことがわかる。

4. まとめにかえて—今後に向けての展望—

本資料では、旧御師家に伝わる覚え書きを通じて、明治30年代に宇治地区でみられた出産に関する贈答の内

容を確認することができた。宇治地区における一般的な出産に関する祝い方を踏襲した祝いの内容と考えられ、明治期の出産に関する贈答の様子を知る上で、貴重な資料といえる。

また贈答先の記録を通じて、旧御師家間で結ばれた親戚・近隣関係の様子を確認できた。神宮改革後、御師家が廃絶となって30年を経過した後も、旧御師家間の緊密な社会関係を知ることができ、興味深い。

今後1章で挙げた岩井田家所蔵資料における同種の出産に関する記録類の解読をすすめ、旧御師家に伝わる産育習俗の特殊性と、宇治地区全般に伝わる地域性の確認をしていきたいと考えている。また、贈答の相手やその関係についてさらに手がかりを得て、旧御師家を中心とした宇治地区の社会関係の解明に役立てていきたいと考えている。

注

- 1 柳田國男『産育習俗語彙』愛育会、1935年
- 2 頭部が硬い骨板におおわれていることから「金頭」などと書く。「お金がたまる」などとされ、縁起物とされる。
- 3 飯島吉晴「産育儀礼と贈答—『進物便覧』を中心に—」『天理大学考古学・民俗学研究室紀要』18、2014年3月、p23-31。
- 4 恩賜財団愛育会編『日本産育習俗資料集成』第一法規、1975年
- 5 岩井田家所蔵の孫福正編集「旧御師岩井田右近家系図」（1982年10月）を基本とし、「内宮職掌家譜」（江戸期）「岩井田家先祖紀念録」（1908年6月）の注記を加えて作成された（濱千代早由美作成）。
- 6 皇學館大學資料編纂所編『神宮御師資料-内宮篇-』（1980年6月）。幕末から御師廃止の明治初期にいたる実状を記録した4つの内宮御師資料からなる。
- 7 出産祝いを贈ってきた先は、横地、澤瀉、浦田、十文字、玉串、ほうらゐ、久保豊、谷崎、岡野豊吉、上野次郎吉、（田中）平助、河村辰、山下治助、岡部藤之助、一方祝返しの送り先はおもだか、ほうらゐ、岡野なか、田中平助、山下治郎、岡田駒太良、横地九三良、萩本竹次郎、横地見重、岡部新七、岡部藤之介、久保忍堂八、久保豊吉事、谷崎正□、浦田長元、横地正重、横橋、上野次郎吉、孫福。うち『神宮御師資料-内宮篇-』で旧御師家と確認できた家の者には下線を引いた。
- 8 濱千代早由美「幕末期の伊勢・宇治における御師家の縁組みにみるケガレ観—「廉引取之引留」をめぐる—」『女性と経験』第41号、2016年10月、p126-136。
- 9 前掲5) p128 参照。

凡例

- 一 岩井田家所蔵にかかる「尚武出産祝」(横帖一冊三枚綴り)の全文翻刻である。
- 二 翻刻にあたっては、原文に忠実にあるようつとめたが、旧字体、異体字は通行の文字に改めた。また、字配等もほぼ原本通りとなるようつとめた。

〔表紙〕

明治三十六年二月廿五日

尚武出産祝

岩井田家

〔二丁表〕

なわ引もち

くはりさき

- 一 今在家 横地
- 一 澤瀉
- 一 浦田
- 館 十文字
- 玉串
- ほうらゐ
- 久保豊
- 谷崎

〔二丁裏〕

尚武安産祝覚

浦田 岡部藤之介

山下治助

河村辰

平助

上野次郎吉

岡野豊吉

一うこん 半反

おもだか

館町

一やまともめん

ほうらゐ

一かなかしら 三ツ 岡野なか

一同 三ツ 田中平助

一うこん 山下治助

一うこん 岡田駒太良

横地九三良

一うこん 荻本竹次郎

一うこん 横地晃重

一うこん 岡部新七

一うこん 同藤之介

一うこん 久保忍堂八

一うこん 谷崎正

一うこん 浦田長元

一うこん 横地正重

一ます 中 横橋
一うこん 八尺 上野次郎吉

〔二丁表〕

一うこん 浦田孫福

(以上)

News Letter No. 2

伊勢参宮ツーリズムの近代史に関する実証的研究 ―御師廃止から昭和戦前期まで―

基盤研究 (C) 17K02146

2018年3月31日

編集：谷口裕信 (皇學館大学)、濱千代早由美 (帝塚山大学)

発行：平山昇研究室

〒813-8503 福岡県福岡市東区松香台 2-3-1 九州産業大学商学部観光産業学科

URL : <http://www.kyusan-u.ac.jp/research/presentation/nletter/index.html>